

東方社畜妻

続空秋堵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢送り異変。それが起こってから一日だけランダムに幻想郷の少女が一人外の世界に送られることとなった。紫は考え一人の男の元で少女たちの世話をしてもらうように契約して一難を終える。これは幻想の少女と社畜男一人が紡ぐストーリー。……つというのは表向きでただひたすらイチャイチャするだけだぞ。内容なんてないぞ。

気まぐれ投稿なので、消えたか生きてるかは気分しだい。

目次

社畜男

社畜のごとく！

1

13

社畜男

「時間だ」

時刻は午後二時十五分。

とある会社の待合室で腕時計を確認した男はその場で立ち上がった。

改めてザラつと辺りを見回す。高級とは言い難い椅子に机。値が張ったように見せかけたソファが中央に鎮座しているがアンバランス。金がないのに意地で買ったような最新のコーヒーメイカーが端っこにあり位置どりが悪い。一目でわかるような小企業。

やはりこの時点で帰っておくべきだった。時間を無駄にした。

そう考えながら踵を返そうとする。

「お、お待ちください！」

慌ててこの部屋まで案内した仲介人は引き止めようとするが男は聞こえないように扉に手をかける。

「時間すら守れない会社となんの話をすればいい。社長殿が忙しい身だと言ってもそれはこちらもそうだ。タイムイズマネー、一秒は三億の価値があると思え」

それだけ伝えて部屋から出て行く。

表まで出るために歩いて行く途中、見たことのある人物が見えた。今回の仕事の最重要人物。社長殿。決して走らずに、それでも大急ぎで向かうように早歩きする彼は滑稽にしか見えない。

社長殿がこちらに気づいたようだ。

慌てて愛想笑いを浮かばせる社長殿は畏まりながらも気安く喋りかけてくる。

「おや、すみません。大変お待たせ致しました。仲介人に案内はされませんでしたか？ ささ、待合室に行きましょう」

「申し訳ないですがこの仕事はお流れとなります。それでは」

「ま、待つて欲しい！この話が流れたら我々の会社はどうすれば……!?!」

血相を変えて大声で叫ぶ社長殿に私はハッキリと伝える。

「知らんな」

膝から崩れ落ちた社長殿を背に私は会社から出て行った。

時間は有限である。

そして金以上の価値がある。それが私の持論だった。このまま時速四キロの速さで歩いて次の取引先の会社まで行く。私はタクシーやバスを嫌いとした。金の無駄だから

らだ。だからこそ全て歩いて向かう。他県や海外の場合は例外だが、県内は自分の歩行速度と取引先の場所までの距離を計算し完璧に仕事をこなす。

睡眠時間は三時間あれば充分だ。それと身だしなみや風呂に飯を含めて二時間。残りの十九時間は全て仕事に当てる。娯楽などはない。仕事させ出来ていればそれで良いのだ。

自分の社長からは休みを取れだとか趣味を見つけろと言われたものだが全て余計なお世話であり無駄である。こんな生活を十年続けている。

染み付いた時間感覚を確かめるように向かう途中、胡散臭い客に邪魔される。

「もしもし、そこのかっこいいお方」

私、八雲紫はこの外の世界で仕事があった。だからこそ幻想郷の時のような服ではなく、淑女らしいドレスに身を包み和かに前を歩く彼に声をかけるのだ。

「……」

無視された。

ちよつ、待つて待つて。あれ、気づかれてない？それとも後ろの人に喋りかけたんだろう的に考えられた？

まさかこんな女神様ですら裸足で逃げ出しちゃう美少女八雲紫ちゃんを無視するなんてありえない。きつと気づいてないんだらう。

「もしもし、そのイケメン」

少し古かっただらうか。

なんだか昔のナンパのような気がした。霊夢がいたら「ぶっ」と笑いだすだらう。いかんいかん。ナウでヤングな紫ちゃんが言うことじゃなかっただらう。反省反省。

「・・・」

またもや無視される。

また勘違いされたと思つて彼の後ろ、前、隣と見るが人の姿はない。私はやっと気づく。これは故意で無視されると。

「ちよつと、あなたよあなた！」

私は彼の腕に抱きついた。こうでもしないと止まってくれそうにないからだ。

すると彼は訝しむような視線を送ってきた。

「すまないが、美人局は間に合ってるんだが」

「だれがビッチよ!?!」

この男、開幕最初の言葉が売女には間に合ってるなんて失敬な。

思わず殺してやろうかなんて思つてしまったが慌てて咳払いを一つ。

「本日は昨日お世話になった少女の代わりに御礼しに参りました」

スカートの裾を持って優雅に一礼。

「昨日の少女、古明地さとりは無事に家まで帰れたのでご心配にはおよびませんわ」

「一分のロス」

「ですのでその御礼と及びお願いがあつて参りました」

「二分だ」

「昨日のような少女がまた、いや正確には明日の午前六時に誰かがやってくるでしょう」

「三分」

「ですからどうかその人をお側に置いて何事もなく一日を経過して欲しいのです」

「四分だ」

「あの、聞いてますか？」

こちらが折角話をしていけると言うのにどうして折るような真似をするのだろうか。

彼は私の話の耳を傾けてはいるんだろうが常に腕時計を見ていて私の目を一度たりとも見はしなかった。そんな調子の彼に思わず尋ねてみるが彼は約五分かと呟くとこちらの顔を初めてみた。

「うむ、話はわかった」

「本当ですか!？」

意外な返答に思わず顔を上げる。が、彼は冷淡な瞳をして睨んできた。

「だがどうしてくれる?」

「はい?」

彼はため息を一つ。

そのため息には憤りが込められていた。

「時間が五分も経過してしまっただと言っている。どうしてくれる? 私のパーフェクトな一日を崩してくれて」

「びっ!?!」

その瞳は人をも殺せそうだ。きつと幻想郷でも十分やっていける威圧。

思わず情けない声を発してしまっただが妖怪の賢者である紫ちゃんはこの事では怯んだりはしない。

「それは大変失礼致しました。これでお話は終わりなのでどうぞ行き先へお向かいくださいませ」

そう言っただけで早足で帰ろうとする。このまま人通りの少ない裏路地にも行っただけの間を開いておさらばだ。

「待て」

肩掴まれたあああああ!?

死ぬ、殺される。と情けなくも妖怪の賢者(笑)は涙目になった。だって怖いのだ。あのハイライトのない瞳が。よく見たらこの人常にハイライトを失ってるではないか。一体どうしたらこうなるのか。感情の無い秦ころですらこんな冷淡な瞳はしないだろう。

「五分だ。この時間はデカイ。それをお前の話を聞くのに消費してしまったのだ。この意味がわかるな？」

「え、えつとたかが五分なら走れば間に合うのでは……」

「事の重大さが理解出来ないようだな。五分あれば本能寺の変も解決できただろうしペリー来航だって対策できたのだ」

「なにそれ五分凄い。……ってそんな訳ないじゃない!？」

「馬鹿め、こうしている間にまた一分経過した。六分あればサリン事件は始まっている」

「うぞだんどんどこどーん！」

「見ろ七分だ。七分あればパスタが茹で上がったぞ」

「一気にレベル下がりましたよ!？」

ぜえはあと息を切らす。つて紫ちゃんやんはピチピチの17歳だぞ☆

この男、話は分かるが融通が効かなそうだ。どうしたものかと悩んだが直ぐに解決策

は浮かんだ。

「もし、目的地まで一分とかからずに行けたらどうでしょう?」

「ふむ、それは大変興味深い話だ。だがどうだ?ここから目的地まで三十分は必要だ。それを一分に早めるなぞジェット機でも引つ張つてくるか。いや、ジェット機でも無理かな。乗り降り時間を考えて」

「だから、それが可能ならば?」

私はニヒルに笑う。彼は冗談で私が言っている訳じゃないと悟と腕を組み、そして告げる。

「やってもらおうか」

彼はそう言った。

私は口を釣り上げ笑った。さあさつきから脅されて怖い思いばかりしたが次はこっちの番だ。隙間で移動して衝撃と未知への恐怖を一変に味あわせてやろう。妖怪の賢者をなめるんじゃない。

「ふむ、本当に一分のようだ」

「あれえ?」

時間を確認して冷静に言う彼の姿をみて思わず変な声を出す。

彼は驚いていない。恐怖も微塵に感じていないようだ。

便利なものだな・・・と呟く彼を見て逆にこちらが怖くなった、この人、働きすぎて感覚がおかしくなっていると。

さつきも普通なら信じてもらえないような夢のような話を平然と受け入れ、そんなことより仕事だと思っていた。彼は物事に対して全ての優先順位がすべて仕事で出来ているのだろう。

そう思うと私は耳を塞ぎたくなったものだ。

「よし、ならばこうしよう。私はその少女たちとやらを受け入れる。だからこそお前は私をこの隙間とやらで仕事場まで運んでもらう」

「……………嫌だと言ったら?」

「これは契約だ。断るなら私も少女たちを拒もう」

なんともまあ理にかなった事だ。お互いに仕事をして報酬がある。WINWINな関係だろう。正直言って面倒くさい。妖怪としてこいつを脅してもいいだろう。でも彼の目を見ているとそんな気もしなくなる。

脅したところで見向きもしないだろう、この男は。それより仕事だと言って仕事を優先するやつ。さとのりと言った通り悪い人じゃないだろう。だって仕事が好きすぎて女

の子に興味がなさそうだ。こんな美少女紫ちゃんが何度か色仕掛けしてもまるでどうじないような人。それはそれで腹が立つがまあ、

「合格」

私は嬉しくなって微笑んだ。

実は私は既に脅しをしていたのだ。普通の人間なら失神してもおかしくないほどの妖力を、威圧を。

そんな私に向けて同じく脅しを仕掛けるような人だ。弱すぎず、強すぎず。彼女たちを受け入れるには充分合格点。だから私は彼の契約とやらに乗ってみるのだ。もし、彼が彼女たちに害をもたなすなら殺してしまってもいいだろうし。

「いいわ。その契約、乗った。これからよろしくね。私は妖怪の賢者、八雲紫」

「なるほど、昨日の子のようにそういう設定を持つているんだな。私は白露。よろしくお願いしよう」

なんだかまあ妖怪のことを設定だと勘違いしているようだが契約は完了である。

仕事へ向かう彼の後ろ姿を見て私は踵を返した。

なんだかまあ、頭痛の原因が一つ消えた。

そう思つて私は隙間を開いて幻想郷へ帰ることにした。

「ただいま」

「お帰りなさい」

私の帰還に声をかけてくる少女、霊夢。……………ではなくさとりだ。

「なんとかまあなつたわ」

「それは良かった」

さとりは微笑するように小さく笑むと手元の紅茶を口へ運んだ。

「彼、変人だけど悪い人ではなさそうね」

「ええ、素敵な人ですよ。私は……その……優しくしてもらっちゃいましたし」

そう言ってもじもじするさとりを見て可愛く思いいじりたくなつた。

「その言い方やつぱりエロいわね」

エロいと呼ばれて頬を赤くして煙を上げる。

やはりこう言う話には免疫がないらしい。

「できたらもう一度会いたいんですけどね」

「まあそれは『夢』次第じゃない?」

「そうですね、『夢』次第です」

私は頭痛がした気がして頭を抱える。

そう、こうして紫がわざわざ外の世界まで行つて特定の人をお願いするなんてことはありえない。それ相応の理由があつたのだ。

それこそ、彼女たちの世界で言う異変なのだけど。

「まったく、本当に面倒くさいことになつたわね。この『夢送り異変』は」

そう、時は遡る。と言つても一昨日見た夢と、それに送られてしまつたさとりの話なのだけど。

「じゃあ改めてもう一度話してくれるかしら？」

「ええ、もう一度確認しましょうか。今回の異変について」

さとりは紅茶の最後の一口を飲むと紫に昨日体験した不可解な物語を語るのだった。

社畜のごとく！

不思議と不可思議の違いはなんだろうか。そう考えたことがある。

地霊殿と呼ばれるこの地でやる事がなく退屈で持て余した私のやることは読書かペットを愛でること。いつもいつも同じ日々で、それが嫌とは思えないが新鮮味が無いとは日々思う。たまに起きる異変だつて大概が地上でのことで地底はまるで関わっていない。だから耳に挟む程度で実際に見たわけでもない私は面白くない。

いや、面白くないと言つてしまうと私の生まれを否定しかねない。

だつて私は覚妖怪。心を読む程度の能力を得ている古明地さとりなのだから。

心を読むことは面白くない。私は断じてそう言うだろう。他者が聞いたら便利な能力だとか嫌らしい能力だと言うが私は後者よりの答えが出る。例えば私が殺人事件に巻き込まれたとして集められた一室で始まる推理。誰が犯人で誰を信じたらいいのか分からない緊迫感。誰もが胸を高鳴らせるだろう。恐怖や緊張、それに半疑。そんな様々な感情の中で私は孤独に笑うのだろう。

なぜなら、私には犯人が分かつてしまう。誰が犯人で誰がどんな感情を抱いているのかが目で認識するように、体で体験したように読めてしまう。私だけは絶対にその様々

な感情の中に入れないのだろう。だからこそ孤独。普遍的な感情に身を委ねられない虚無感。

これでは先の展開を読む程度の能力じゃないか。

私は読書家だ。様々な本を読む。この地霊殿には数々の本が眠る。それも人が一生かけても読み尽くせないほどの。

本は好きだ。展開が読めないから。誰の声も入ってはこない、入ってくるのはページをめくる音だけ。それが最高のBGMとなり続きが知りたいと手が動く。それが今の幸せだった。

読むものは何でも読んだ。

推理 ミステリー サスペンス ホラー サイコホラー ファンタジー。例をあげたらキリがない。私は乱読派のようだ。

ちなみに余談だが、ミステリーとサスペンスの違いは大きい。

ミステリーは最後まで犯人がわからなくて謎を解いていくと犯人が最後にわかる作品のことで、逆にサスペンスは最初から犯人が分かっているその犯人が追い詰められたりする姿を見てハラハラしたりと頭を使わずとも物語の展開を追っていき楽しむもの。

ホラーは非現実的な体験を通して恐怖を刻むものでサイコホラーは現実的なはずなのに非現実的だと思えてしまう作品だ。私としてはサイコホラーの方が好きだった。

人の、答えが分からなくてぐちゃぐちゃになった成れの果てを見れるから。私には一生体験することも見ることもないその姿は酷く美しく見えた。ああ、愛おしいと。

閑話休題。

そんな乱読派な私だが一つ分からないジャンルがある。

いや、読んでいて内容は理解できるし楽しめるのだがなぜこう呼ばれるのだろうかと疑問に思う。

『SF』

もともと横文字に弱い私にはこのジャンルの意味が遠い高台に見える鳥に見えた。人間に限りなく近い妖怪として生まれたからか他の命、生き方が私には理解できないし誰にもできない。

人々は羨むかもしれないが、鳥類の持つ羽。飛べることに想いを馳せるが実際にはその羽は重いのかもしれない。真実は彼らのみぞ知る。

そんな未知な『SF』だがたまたまこちらに暇つぶしに来た八雲紫に聞いたところ、それは『少し不思議』の略なんだとか。私は感心したように頷いてしまった。

宇宙人と相対であると証明してみせた曖昧な彼の物語は確かに少し不思議な物語だった。私は絶対に指を合わせたくなかないが。

私は探究心が旺盛だ。どんな物語でもどんな現実でも一体誰がどう考えていて何を

思つて、想つてくれているのか探究し続けたかった。だがそれは叶わない現実。自分の想いとは裏腹に全ての感情が想いが流れ込む。だから実際に起きた事件なら犯人が分かるし、鳥のように翼はないが飛べてしまう。

つまらない。

自分が環境が私の興味を持ったことにあつさりと答えが出てしまう。積み上げたブロツクが蹴飛ばせばバラバラになるように当然だと言う結果が残る。私は生まれる場所を間違えたんじゃないかと思つてしまうが、今の生活が気に入っている自分もいて葛藤。ああ、なんて幸せなんだろう。

だが幸せ過ぎてはつまらない。だからこそ、今私は刺激を求めているのだ。ちよつとした料理にスパイスを探して。

夢を見た。

私がたくさんの背の大きい建物に囲まれて鉄の塊がとんでもない速さで過ぎ去っていく。橋には線路があつてそこにまた鉄の塊が過ぎ去る。ここはどこだろうか。なんの夢なのだろうか。呆然としていると甲高い音がして、その音に惹かれているのか同時に多くの人間が白い横線を跨ぎながら進んでいく。私はその音に冷水を頭からかけられたように意識が戻った。よく見たら上に赤と緑の物体が見えた。その物体の絵を見

る限り緑でこの線を渡るようだ。私は立ち尽くし人間たちの姿を眺める。冷静に今の状況とこの場所の分析をし始めたところ私は探究心が旺盛を通り越して危機意識がないのかもしれない。今まで自分が危機的状況に陥ることがなかったせいだろう。

「(ハハ)は(ゴ)かしら？」

やつと開いた言葉は平凡で知的ではない。だがこの一言で他者から私が戸惑っているのだと分かるだろう。

なんとも不思議な夢だ。でも同時に楽しくて、仕方がない。ここはどこなんだろう？同時にわくわくしている。あの塊はなんだろう？同時に惹かれている。ああこの状況が、晒せた自分が輝いて見える。覚めたくない夢だと思った。

「……なんで覚めるかな」

一瞬だった。自分が夢を見ていたいと思つて直ぐに現実に戻され、不服でぷくぷくと頬を膨らませた。

「もう一回寝たら見れるとか。……ま、そんな上手い話もないか」

まだ朝の六時前。目をさますには早いだろう。もう一度同じ夢を見れることを願つて瞳を閉ざした。

「本当に見えるなんて」

案外、言ってみるものかもしれない。寝て覚めたら同じ夢にいた。先ほどと同じ場所に、信号機の前で立ち止まっていた。

思わず踊ってしまいそうだ。だが人前なので自重。いや、夢だしいいのもかもしれない。

信号機が青に変わる。同時に人々が歩き出すのを見て私も歩き始めた。目的地はない。あたりまえだ。見知らぬ辺境の地なのだから。何時覚めてしまうかわからない夢。今だけは楽しもう。

「ふんふんふんふん♪」

それから私は好きなだけ歩いた。どこまでもどこまでも。気持ちが高揚して思わず鼻歌をするまでに。ここには私の知らないことが多すぎた。未知なる物が多すぎた。ごく普通な道端のガードレール一つで探究心、知的好奇心が脳を震わせるのに充分すぎる。道端の石を蹴飛ばしたり花を摘んでみたりもした。

明らかに一時間と経過した気がするが夢の時間は現実の時間とは異なるだろう。多分。これもある意味楽しみだ。

それに時間が経てばお燐やお空が起こしにくるはずだ。それまで自由に歩いていけばいい。だってこれは夢なのだから。

どこまでも行き流石に覚めてもいいだろう思えた頃、
「私はどれだけお寝坊さんなのかしらね」

異変に気付く。

『夢の世界の物は果たして触れることが出来るのだろうか』と。

それ気づいた時、私の行動は早かった。

もう一度確かめるように石を蹴飛ばす。転がった。止まっている鉄の塊を覗いた。
自分が映る。頬を、引っ張った。

痛かった。

いた、かった……………？

「……………ッ!？」

それを把握してゾワリと悪寒が体を巡った。背筋が凍り目をパチクリとした。改めて行き交う人々をみる。私を見ていた。見ていた。気付いて慌てて駆け出す。何故自分が視線を集めていたのかはわからないが夢に認識されている現実が恐ろしい。私は夢に囚われてしまったのではないか？そんな疑問が浮かんできた。

怖くなった。探究心が旺盛で、恐怖を危機感を知らなかった私が激しく胸が上下して

戸惑っている。なんだか人通りの少ないところに入っていく。取り敢えず今は誰の目にも止まりたくない。この悪寒が現実味を帯びるから。

それから考えることは同じだった。私はどうしたら夢から覚めるのか。どうしたら帰られるのか。私はこれから、どうしたらいいのか。

帰る方法が分からず、行く当てもない。ただ未知なる場所で過ごすこの時間はさつきまでと異なつて息苦しい。この絶望的状况は普遍性的感情に乏しかったさとりを危機感という普遍性を取り戻す。

今にも気を失いそうなほどに。

「あれ、お嬢ちゃんなにしてるの?」「一人?」「・・・」

一人苦しんでいると唐突に入ってくる若僧が三人。一人はちやらく、一人は心配そうに、一人は黙つて。だがこうして喋りかけられたことによつてさとりは夢に今生きているのだと確信した。夢に生きているのではなく、文字通り、夢の世界で息をして生があるのだと。

「ひっ」

この状況がさとりを酷く混乱させた。息が苦しくなつて、冷や汗が止まらない。

顔が次第に真っ青になつていく。そしてさとりは無意識に能力を使つてしまうのだ。

「(なんでこんな危険な場所に? 最近柄の悪いのが多いしな、早く避難させないと)」

「変わった服だな。この国の人じゃない？ 気品があるしどこかの令嬢かな？」
「おうどん食べたい」

彼らは見た目にそぐわず大変善良な人たちなのだと思はれるさとりには分かるはずだったのだが、いかんせん。さとりは混乱していた。

だから彼女にはこう聞こえていたのだ。

『可愛いお嬢ちゃんだなあ？ おい、ちよつと遊びに行こうぜえ？』

『なにかあつたら危ないよ、家において。まあ、僕たちが危険かどうかはわかんないけどね』

『(おうどん食べたい)』

「……………」

心を読んださとりは勝手に萎縮した。想像の中の彼らの言葉が現実だと思つて。

だんだんさとの目に涙が浮かんできた。今にも溢れそうほどの滂沱の涙が。それを見た男たちは慌ててさとりの手を掴む。

「おい、泣くんじゃねーよ」

「とりえず、交番いこうか。迷子の届け出したらお母さんも迎えにくるだろうし」

「……」

彼らは勝手にさとりのことを年下だと思いがさとりの方がずっと年上なのは余談だ

ろうか。

ちやらい男がさとりの手を掴んだと同時にさとりはついに叫び出してしまふ。

「だれか、誰か助けてください!!?!」

聞こえませんか!と続いて叫んだ。

「ちよ、おま人が親切にしようとしてるのに……」

「待って、これ不味くない?これで人が来て勘違いされたら……」

「蕎麦もいよいよね」

慌てふためきさとりの叫び声が響き渡った。冷静な男が逃げ出すように提案するがちやらい男は誤ってさとりの口を手で塞ぐ。これで完全に事案。犯罪確定の絵図らが完成した。

もうダメだ。もう、私は……。ごめんね。

お隣……最近尻尾が取れそうなくらいの痛みがあるって言ってたけど、ごめんね。私
が引つ張ってどこまで伸びるか研究してたの。

お空……最近おやつや食後のデザートが気づいたら無くなって言ってたけど、
ごめんね。実は私が食べて「知りませんか?」て聞いてきた時「鳥頭だから食べたこと
も忘れてたのよ」なんて言ってる。

走馬灯のように思い出す楽しかった思い出。

時にはお燐に丸いボール状のカマキリの卵を転がさせたり。時にはお空にバードウオッチングしたいからそこで待つてと云つて楽しみにしているお空……じゃなくてうなじを描いていたり。あの時、お空が見せると笑い覗いてきたのを「下手だから見せられないよ」と微笑んだのは後々「私なにやつてんだろ……」て思い直したからの。ああ、全て良き思い出だった。

でも、私は今穢されちゃうんだね。全てを諦めてしまった頃だ。物語は動いた。

『……………ッ!』

唐突に手が離された。

恐る恐る目を開けると、そこには先ほどの男性三人組が壁に頭をのめり込み動けなくなっていた。私は何事かと震えたが、直ぐに後ろから違う男性の声がした。

「まったく……。こんな小さな女の子に三人も男が絡むなんて、恥ずかしくはないのかい？つて聞こえてないか」

そう言つて首を鳴らした彼は鋭い目つきで呟いた。

高そうなスーツに腕時計、ネクタイや靴までもその辺の物ではないと一目瞭然。全てブランド品のものでらう。さとりとて高そうだと思つた程度で価値はわからないが。

さとりは状況が上手く飲み込めなくて視線を四方八方に向ける。先ほどの壁にのめり込んだ三人を見てみる。

「え、なに、どゆこと?」

「ほら、側からみたら事案だったじゃん……てか痛い」

「(和食はいいぞ)」

それぞれ何か言ってたみたいだが次第にそれが聞こえなくなつた。きつと意識が飛んだのだろう。

そして助けてもらつた男を見る。彼は私を見ると一礼して口を開いた。

「見苦しい姿を失礼。そして助けが遅れてすまない、声が聞こえたものでね。急いでやって来たはいいが、怪我はなかつたかい?」

「え、あの、えつと、…… はい」

一瞬ぼーつとしそうになつたが慌てて返事をする。

「そうか、ここは危ない。人通りも少ないからね。早く立ち去るといい」

そう言つて気を使つてくれた。だが私は言われた通り早く立ち去りたかつたがそう出来ない事情があつた。

びつくりしすぎて腰が引けているのだ。

「……おや、私としたことが配慮が足りなかつたね。お嬢さん、お手を拝借」

優しく手を取つてくれて立ち上がらせる。彼はポケットからハンカチを取り出すと服の汚れてしまった場所を払うようにしてくれた。至り尽せりである。

「じゃあお嬢さん。私はこの辺で、君も真つ直ぐお家に帰るといい」

そのまま去つていく。そのまま後ろ姿を見つめていたがやつと彼女は慌てて彼の服を引つ張つた。

「えつと、すみません。しばらく一緒に行動してもよろしいでしょうか」

「……………どうして？」

「まだ、信用できそうだから……………です」

彼は少し思考した後、勝手にするといひ。と言つてくれた。私は彼についていく。初めてこの地でまだ信用できる人を見つけたから。

「ねえ、藍。至急地霊殿の、いや古明地さとの様子を見てきて」

「……………なにゆえでしょうか？」

「いいから」

はあ……………と呟いて藍は地霊殿へと向かつた。

それを見届けて八雲紫は手に持っていた扇子を閉じる。どうして藍を地霊殿に向かわせたのか、紫はこの異常事態に心がざわめいた。しばし待つと直ぐに藍は帰つてく

る。

「紫様、申し上げます。古明地さとりが唐突に姿を消し行方不明となっております」

「やっぱり……」

思わずため息を。

私は目を閉じて考える。どうしてこうなったのかを。

古明地さとりが唐突に姿を消したことは隙間に繋がっている様々な場所を見ていて気がついた。恐らく古明地さとりは幻想郷のどこにもいない。だって彼女は、

「紫様、古明地さとりは一体どこに行ってしまったのでしょうか？」

「そうねえ……外、じゃないかしらね」

隙間でひたすらに探してようやく見つけたさとりだがその場所は幻想郷ではない。外の世界と呼ばれる人間社会で発見された。彼女は今すぐさとりの救助に向かう事も考えたがこの異常事態の正体を掴むためにしばらくの間さとりをあちらに置いておくことを紫の中で決定される。申し訳ないがさとりには頑張ってもらいたい。あちらの世界が辛いかもしれないはこれ以上の被害が出た場合どうするかを検討するために。

私がこの男性について行くこと数分。話すネタがないが何かを話さなければいけないと思ひ口に出す。

「助けていただいてありがとうございます。えつと……」

「ああ、私の名前だね。白露……は契約上の名前だし五月雨と呼んでくれていいよ」

「分かりました、五月雨さん。私は古明地さとりです」

契約上の名前とはなんだと思つたが聞かないでおく。それに心と呼んでしまえがいのだから。

先ほどから唐突に無理言つて勝手について行く私だが彼は私のことをどう思っているのだろうか。少し、覗いてみることにする。今彼がなにを考えているのかを。

「仕事だ仕事だ仕事だ。今ので約10分のロスだからこそ今からは「次の取引先まであと十五分かかるとしてあそこから逆計算を……仕事だ仕事だ仕事だ」「この子は一体何者なのか。見た所どこかの国の令嬢、または王女か、正体が分からないが帰ったら国に聞いてみるとしよう、なに関わりはある。それよりも仕事だ」「貴族の娘だった場合このまま放置しておけば問題になる。私がしばらく保護をして国の偉い方に投げよう。今は仕事を……」

なんだか、凄いい勘違いをされていた。私がどこかの国の貴族の娘か女王とかでこのまま置いておけば事件になるから保護した。というのが彼の結論だったらしい。

それよりも………仕事仕事つてこの人大丈夫ですか!?!なんか呪われたみたいになつてますよ!?!よく見たらハイライト無いし!?!

私はとんでもない人に関わりを持つてしまったのではないかと頭を悩ませるがやはり今信用できるのは彼しかいないので大人しくついていく。だいたい十五分くらい歩いたあと、彼は暫く待つていて欲しいと言って大きな建物の中へ入っていく。

私は待つていると言われたのだし待つていたかったが先ほどの経験を思い出して身震いし彼の服をまた引つ張つてしまう。

「一緒にいくかね?」

頷いた。

「お待ちしておりましたよ、朝露さん。さき、おかけください」

「失礼します」

「おや、そちらの方は?……もしかすると遂にご結婚なされたのですか!?!」

いやあめでたい!?!と一人で笑顔になるこのおじさんだが見た限り偉い人なのだろう。

五月雨さんだったはずの彼がいつの間にか朝露になっていたが気に留めておくことにする。

にしても結婚か。私が誰かと結婚したら……と考えるが想像出来なかった。おじさんは五月雨さんとその横で手を握ってる私の姿を想像しているようで、そう思うと私も意識してしまい頬が染まる。

それからは長つたらしく難しい話が始まった。大体は理解が出来るが流石に株状況がどうこうのと言うくだりは良くわからない。とりあえずお互いの会社のメリットデメリットについて話し合っているようだった。

無意識ながら発動する能力によるとこの通り。

「いやあ、ついに朝露さんが結婚か。いい男なのに女の影すら見えなかったから心配していたが。うん、これはよかった。あの小柄な彼女には朝露さんをよろしくと言うことにしよう」

「（あいつも変わらず無駄話が多い。早く議題を進めるべきだ。これだけで三分四十秒のロスタイム）」

「（このじじいの秘書本当に辞めたい。でもお給料いいしなあ……）」
以上の通りである。

心を読んだ私としては複雑な気持ちだった。

この社長は秘書にも五月雨さんにも信望が厚いと言うのに秘書は金の為に隣に
だけで面倒くさそうだし、五月雨さんは完全に仕事のことしか脳にないようだ。

だからといって私がどうこう口出しできない。そのまま話が終わるのを待ち続けた。

「いや、有意義な時間でした。ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとうございます」

二人はガツシリと握手を交わし微笑んだ。

「次はどちらまで？」

「次は三千院家までですね」

「ははあ、あそこのお嬢様は気が強い。そちらのお嬢さんに文句を言うかもしれないで
すし少し着飾るべきですな。いえ、今のままでも十分美しいですが高級品の一つや二つ
がないと誉められかねない」

「ご忠告感謝します」

それで本当に話が終わり五月雨さんが扉に手をかけ去ろうとしたときだ。

相手のおじさんが私に話しかけてきた。

「朝露さんはとても繊細で難しい方だ。もし本気なら苦勞するでしょうが受け止めてあ
げて欲しい。彼は本当にいい男なのだから。朝露さんをよろしく」

「……………はい」

戸惑った私は愛想笑いを浮かべて立ち去った。

これにてお仕事終了……のようだが続きがあるようだ。

彼と会社を出てついて行くと次に向かうのはまたもや大きな会社。だがそれは先ほどのように企業ではないようで沢山の服やドレスにアクセサリーなどどれも高級そうで美しいものがあるお店。

彼が店内に入っていくと急ぎ足で奥から店長らしき女性が現れた。

「五月雨様、どうぞおいでくださいました。本日はどのようなご用件でしょうか？」

「この娘に一番似合う服とドレスにヒール、それに流行りのバックとネックレスをいただきたい。センスは任せるよ」

「ありがとうございます」

淡々と告げる彼とそれに深く頭を下げる店員。ぼーっと見ていると店長ではない女性店員数名が私の手を取り引いていく。

つてちよつとまって。

「え、なんですか」

「だから君の物を買いに来たんだ。時間が勿体無い、早く寸法してきなさい」

そんな、勝手について来てるだけなのだからそこまでしていただかなくても。と言お

うとしたが先ほどの会話を思い出した。三千院家は厳しい人間らしく飾らなければいけない。つまり私の為ではなく自分の為なのだ。当然と言われれば当然だが少し期待してしまった私もいたのが事実。

「ではこちら」

「ささお嬢様」

「久々に可愛い娘 k t k r」

「あの、引張らないでください」

私はどこことなく嬉しそうにキラキラ輝いている三人の女性に連れてかれてカーテンの裏に入れられた。

いや、読んだから嬉しそうな理由はわかってますけど……………。

「ちよ、どこ触ってるんですか!？」

「いいえー、寸法ですよー」

「ですよー」

「キャツ、だからどさくさに紛れて……」

「yes ロリータ no タッチ」

「触ってるじゃないですかああああ！」
やはりこうなった。

「お、お待たせしました」

「ふむ」

出てきた私の姿を見てどこか思うところがある五月雨さん。

確かにこう言う服は初めてきますがどこかおかしいのでしょうか。無意識に心を読もうとしてしまうがその前に彼が口で言ってくれた。

「よく似合っているよ。とても可愛らしいね」

ドキつとした。いや、確かに自分でも似合っているかな？とは思ったけどここまで好感触とは。

少し嬉しくなって頬が熱いが気のせいだろう。

それでも嬉しいのは事実なのでもじもじしそうになるが彼は店長の元で会計を始める。

「合計二千八百万円です」

「カードで頼む」

黒いカードを出した彼の姿を見て申し訳なく思った。イレギュラーな私の所為で無駄な出費だろう。

それとこの世界の金銭感覚はわからないがきつと合計金額は高かった。

店を出た。

「あの、すみません。無駄な出費でしたね」

「何を言ってるんだい? こうして君の美しい姿を見ただけで無駄なんかじゃないさ。お釣りが来てしまうよう。本当に可愛らしいね君は」

「こうやって平然と口説いてくるのは馴れているのだろうか。……そうじゃないらしい。本心のようなだ。」

それを自覚してまた頬が赤くなった。うう……なにか落ち着かない。私なんかそんなに可愛くないというのに。さつきから私は恥ずかしい思いをしてばかりだ。いろんな事を言われて揶揄されると思えばそれは本心で。本当に落ち着かない。でも楽しいと思えているのも事実だ。

「ごめんね。その靴歩き辛いだろう? 靴擦れが起こりにくい素材にこだわるように言っておいたが大丈夫かい?」

「あ、はい。大丈夫です」

確かに初めて履くヒールというのは指の辺りがガクツと下がり踵が上になって変な

感覚だ。素材がいいのかあまり違和感などはないが履きなれないものは少し困惑はする。

「(もし辛そうだったら抱っこでもすることにしよう)」

「~~~~ツ！」

一人悶々とした。想像して、恥ずかしくて、でも悪くなくて。

「さて、三千院家に着いたよ。すまないが腕を借りてもいいかな？」

「えっと、どうしてですか？」

「君はどうやら私の彼女になるかもしれないらしい」

「へ、ふえ？」

「先ほどの社長が勘違いしていただろう？だからこう言う路線もアリかなってね」

そういう事ですか。とホツとする。でもちよつと残念。

だが私は彼にただ付いているだけの子なので素直に腕とやらを貸す事にする。

「で、どうしたらいいんですか？」

心を読んで内容を知るが、私は顔が真っ赤になる。だってこれって

「(こうするのさ)」

「~~~~ツ!？」

本当にお付き合っているみたいじゃないか。

三千院家に入つてからは早い。

中から私より少し小さい金髪ツインテールの女の子が出てきて隣には幸が薄そうなお執事と笑顔のメイドさんが。私のところのお隣やお空みたいな人たちだろう。お隣もお空も心配してないかなあ……。

「待つていたぞ五月雨! それと、その横のちっこいのは誰なのだ? 初めてみるな」

「ナギも十分小さいですよ」

「お嬢様が言えたことではないですよ」

小さい金髪の女の子がナギと言うらしい。この屋敷の主人のようだ。すごい、私の地霊殿ともいいところ勝負かもしれない。

そして執事がハヤテでメイドがマリア。心が読めると自己紹介しなくても名前がわかるのはいいことだ。五月雨さんは本名かわからないけど。

って私も挨拶しておいたほうがいいですよね。

「初めまして、古明地さとりと申します。以後、お見知り置きを」

一応礼儀正しく一礼。それを見た執事が「わー、お嬢様よりお嬢様みたいだ」なんて言っているが声に出さなければ問題ないのだろう。

挨拶が終わるとジーンと私を品定めするように見てくるナギさん。正直、気持ちのいいものではない。

「ふーん、で。五月雨とはどういう関係なのだ？」

私がなんて答えようと悩んでいると。

「この子は私の彼女ですよ」

「ふえっ」「なっ」「あら」

左から私、ナギさん、マリアさんである。

それより彼女って……彼女って……。

「あわあわあわ」

何がなんだかわからなくなって変なことを言っている気がする。

すると執事も驚いたように五月雨さんに言葉が続けた。

「本当ですか！五月雨さん!？」

「本当だよ、真剣にお付き合ひしてる」

心を読めば冗談だと分かるのに分かってなお呂律が回らない。私は完全に暴走している。

「しゃみ、さみ、さみだれしゃん！」

はっはっは。と笑う彼に押揃や揃られたと思うが顔が熱くて仕方がない。彼はなんてこ

としてくれたのだ。

「ほらハヤテ、別に年下とお付き合えることは不自然ではない！むしろ当然なのだ、愛は地球を救うってテレビでも言っているように！」

「いや、でも法律が認めないんですよ！あと僕はロリコンじゃないですからね！」

「誰がロリだゴラァ！」

ナギさんがハヤテさんに飛び蹴りを食らわせた。アクロバティック。

戦闘は苦手なので尊敬してしまう。

「はは、でもね。彼女はこんな見た目だが君たちの誰よりも年上だよ？」

「嘘……だろ……？」

ナギさんがど肝を抜いています。はい、そうなのです。私は百を超えています。みんな若すぎるぐらいです。

「確かに落ち着いてますもんね」

「どことなく気品に満ちてますわね」

二人も納得のようだ。

そんな凄いものを見る目で見ないでほしい。視線には敏感なのだ。

心を読む限り悪い人たちじゃなさそうです。

暫く挨拶した後メイドが客間に通してくれて高級そうな、いや高級な椅子に座る。

あ、紅茶美味しい。

「それで、さとりは五月雨の恋人らしいが」

「こいつ」

「ん？まあいい。五月雨の彼女ならもちろん彼の趣味や人となりを知っているのだろう？」

……。どうしたものか。確かに五月雨さんには会ったばかりかもしれないが、この短時間で良くわかった気がする。

だが趣味ですか。心を読んでみても

「趣味？ 必要ない。仕事さえあればいい」

これでももんねえ……。

どうしたものかと悩んでいるとナギが訝しむ視線を送ってきたのでもうどうとでもなれと思う。

「仕事……ですかね……」

「なんだ、よくわかってるじゃないか」

あつていたらしい。

いや、まあそうでしょうけど。

それからは適当に相槌を打ちながら話は進む。

特に難しい話もなくどうでもいいお話が多い。どうやら今回はナギのお爺様に頼まれて様子見にきた。というのが本筋だったらしい。

「さて、さとりは五月雨の彼女ならもちろんアレはやったんだろう?」

「アレとは?」

「サーモンギアソリッドだよ」

なんだそれは。

え。えっ?と困惑したが読むところ映画のお話らしい。有名な映画で原作はゲームだったとか。げーむが何かはわかりませんが弾幕ごっこ的なノリでしょう。

「2はどのシーンが好きだった? 3のペアー部隊では誰が好きなのだ?」

「お嬢様、古明地さんはゲームなんてやらないと思いますよ。するとしても読書とかだと思えますし」

そうかなあ?なんて二人の会話を聞いていて少し不味いと思った。

ナギはおそらく私とその作品のことを知っているのだと思っている。ここで話が出なければナギから私への興味は失いあまりいい関係にはなれないだろう。読んでナギと同じ感想を言ってみてもいいがそれだと怪しまれるだろうし。

「(まったたくこのお嬢様には困る)」

横から声が聞こえた。

「私は別にゲームも映画も見ないというのに。たまたま企業のお偉いさんがそういうものが趣味なやつがいたから知識として持っていただけで興味はない。ただこのお嬢様に返事をするなら2の放電が葛藤しながらも自由と子供たちの未来のために生きると誓ったシーン。3ならザ・ファイナルとの森の中での一騎打ちが最高だっただろうか」

「……でしようか」

「おお、よく分かつてるじゃないか!!」

ナギはお気に召したらしい。

私は心の声で呟く五月雨さんの言葉をそのまま読み上げただけなのだが助かった。

チラリと横を見ているが五月雨さんは面白そうな顔をしている。そらそうだ。心を読んだのだ。それを口に出せば何かと気付かれるのに決まっている。だが彼は少し表情を変えたと思えば視線を戻した。気付かれてない？

「さて、どうせじじいに呼ばれて夜は本邸でパーティに参加するんだらう？ だったら時間までこの屋敷で寛ぐといい。そうだ、古明地。よかったら私と来てくれ」

「えつと……」

「行つて来なさい」

「はい」

私はナギに手を引かれて部屋を出た。

「古明地はどこのお嬢様なのだ？」

「えっと、それより三千院さん。よければさとりと呼びください」

「じゃあお前もナギと呼ぶと良いぞ」

「わかりました。ナギ」

「うむ、それでよいぞさとり」

私はナギにそう呼ばれて微笑んだ。

「なんだかやつと心を落ち着かせることができそうだ。ナギは私と身長だとか近いからか一緒にいて気を使わなくてよさそうだ。ふうとため息を一つついた。

「私はちよつと訳ありですのでどこの子とは言えませんがすみません」

「よい、事情はそれぞれだろう。うちのハヤテ……まあ執事だっているいろいろあつてここで働いているからな」

いろいろ。わざわざ言葉を濁してくれているのだが申し訳ない。

「だいたいわかった。執事さんは親に売られて拾ったのがナギのようだ。なにかと苦労しているのだろう。」

「さとりはどんな本を読むのだ？ 私は漫画なら大概なんでも読む。冒険ものもミステ

リーものもなんでもだ」

ナギは私と同じく乱読派のようだ。

「私もなんでも読みますよ。漫画はあまり読んだことはないですけど」

「それはもつたいないな。今度オススメの漫画を貸してやろう」

「ありがとうございます」

漫画か。知識としては文だけではなく絵で伝え魅せるものだ知っている。

正直興味はあるのだ。

「私はやはりラブコメとか好きだな。熱血系も捨てがたい。さとりはどうだ?」

「私はSFとか好きですね」

「SFかあ。意外だな」

そうでしょうか?と続く私。完全なファンタジーより少し不思議で現実味があるお

話の方が性に合うのだ。

「ああ。サイエンスフィクションは人を選ぶからな。私は好きだがさとりもSFが好き

だなんて驚きだよ」

「サイエンスフィクション?なんですかそれ?」

「・・・?SFが好きなのだろう?」

「ええ、ファンタジーみたいな魔法の世界とかも憧れはしますがやはり現実のどこかに

見える少し不思議なお話の方が」

「……。さとり、お前はどうかやら勘違いしているみたいだぞ」

その後、ナギからの説明を聞いて穴があったら入りたい気分になった。私はどうやら八雲紫の揶揄られていたらしい。SFは『少し不思議』の略ではなく『サイエンスフィクション』の略らしい。サイエンスとは大まかに言えば科学らしく、SFとは科学的な進化を遂げたことに関連する超絶な物語のことだとか。

覚えておいてください、八雲紫。あなたは私を怒らせた。

「そ、そうだ、うちのペットでも見てみるか? 可愛い猫ちゃんだぞ」
「ペ、ペットですか!」

変に間が空いてしまったのを埋めるためかナギが話の向きを変えた。

だがその向きはさとりにとって物凄く興味のある事柄だったのが杞憂。

そっか。この世界にも動物いるんだ。私は思わず目を輝かせてしまう。

だってペットといえど可愛いイメージがある。お隣もお空もとっても可愛いし他の子たちも愛おしい。ここのペットはどんな子だろうと胸を高鳴らせていると。

「ほら、あそこだ」

「……」

窓の外から見たその二足歩行する虎は果たしてペットと呼んでもいいのだろうか。

この距離でも能力は発動してしまう。

「(つたくあの借金執事のせいで俺の出番が全くねーじゃねーか。原作でも一切触れられなくなったし出てたの巻数が二桁行く前だけじゃねーの？ やってらんね、やっぱあの借金執事を食うしか……)」

・・・。

「見に行くか？」

純粹な瞳で微笑えんでくるナギに

「結構です」

私も微笑み返した。

「どうしてさとりは五月雨の彼女になろうとしたのだ？ 私が言うのもなんだけどあいつは変わり者だぞ？ 三度の飯より仕事をしてたいようなやつだ」

「確かにそうですね」

心を読んで知っている。彼の頭には仕事しかない。

それに私は五月雨さんの彼女ではない。そういう設定なのだ。

「実は、私は五月雨さんの彼女じゃないんですよ」

この子に嘘はつきたくなかった。そう思ったら口に出していた。

「たまたま出会って、お世話になって、迷惑ばかりかけて」

「訳ありなのだな」

そう、訳ありだ。こうして五月雨さんについていくのも外が危険だと分かったからで、この世界にやってきてしまったのも訳ありだろう。帰り方はわからないし、どうすればいいのかもわからない。それでも一つわかったのは、ここは夢の世界なんかじゃないことだ。

心を読んで、人の悪意や善意を感じた。夢を見ることはあるが、その世界は美しい。嫌な悪夢もあるが、心を読んでも葛藤している人はいなかったからだ。

だからここはどこか別の世界。もしかしたら私も昔はここにいた。そう、外の世界なのかもしれない。

「ええ、彼女というのはあくまで設定で本当の想いはないのです」

「本当にそうか?」

「はい?」

「本当にそうかと聞いている。だって想いがなければそんな悲しそうな顔はしないよ」

私はそんな顔をしていたのでしょうか。

鏡がないからわからない。

「恋する乙女は分かりやすいんだよ。男のことで直ぐに楽しくなったり悲しくなったりして表情にでる。素直にはなれないし我慢ばかりしてしまう。まあ私は我慢しないけどな」

「そんな感じしますね」

私は思わず苦笑い。

「だから五月雨との関係を設定と自分でいって悲しい顔をしたっていうことはさとりは、恋しちやっつたんだよ」

鯉？ 故意？………恋!?

顔が熱い、煙が出ている気がする。ってそれは勘違いです！

「わた、わたしがしよんにやわけにやいじやないでしゅかー!」

「いや、それが答えだよ」

苦笑するナギを見てだんだん冷静になってきた。

でもこれが恋なわけが無い。だってしたこと無いし。なによりも五月雨さんは恩人でそれ以上でもない。それに会ってまだ半日。どうしてそんな時間で人を好きになれようか。

「さとり、会って間もないとかは禁止だぞ。恋っていうのはな、突然なんだ。出会って時間が経ってなくても意識してその人のことを考えて好きだなんて思えば好きだし、そう

でもないならそれで終了。もしかしたら発展することもあるしないこともある。私だってハヤテとの出会いは突然で、一瞬で恋に落ちた。理屈じゃないんだよ、自分の感情に嘘はつけない。例えば自分の感情が揺れてもそれは屁理屈で自分が認めたくないだけなのだ。だから時間がどうか出会いがどうか関係ない。さとり、恋はいいぞ」

そう言われて、よく分からなくなってきた。確かにここまでくるのにいろいろあった。不安で仕方がなかった私を見つけて他人に優しくしてくれた彼。その理由は美しくなくて未練がましいような理由だったけど、私はそれでも構わなかった。

嬉しかったのだ。

理由がどうであれ、出会いがどうであれ、今の私が彼に自分のことを考えて思ってもらえて感情の面で想ってもらえて嬉しかった。そこに嘘はない。ナギに言われた屁理屈は認めたくないと言う気持ちの現れなのかもしれない。だって私が今までどうこうと否定し自己完結してきたのは屁理屈に他ならないから。

でも、そんな私でもわからなかったことが何故ナギにわかるのだ。

「どうしてナギはそんなことわかるんですか？」

「んー？」

ナギは背を向けながら頬を掻きながらも幸せそうに笑うのだ。

「だって、私がそうだから」

それが、その一言がどんな言葉や答えよりもすんなり受け入れられた。

「じゃあナギも執事さんが好きなんですね」

「ああ、大好きだ」

素直に言葉に出すナギを見て少し羨ましく思う。心の声そのまま言葉になって出てくるので裏表のない素直な子だと思える。

「この子はいいい子だ。」

「お互いに頑張ろう」

「えっと……はい」

そう言つて固く握手を交わす。約束だぞ。とナギが微笑んでくれて私の心が暖かくなれた。

なんだか初めて身近にいる人を見つけた気がして握手は暖かく感じた。

私、古明地さとりは恋しているらしい。

ナギに言われて意識して恋がなんなのかわからないけど、恋してるんだなって思えます。五月雨さんのことを考えると、暖かくて嬉しい気持ちが見れる。それと同時に切ない気持ちも現れる。この気持ち心地いい。悩んでるはずなのにこの悩みが幸せだ。これが恋なんだとナギは言っていて、恋は素晴らしいと語った。

確かに、素晴らしいと思う。今こうして考えているだけで明るい気持ちになれるから。

時刻は夜。月の光が天高く輝いて全てを照らす。

私たちは今、ヘリコプターなる空を飛ぶ鉄の塊に乗って三千院家より大きな豪邸にやってきています。中で様々なセレブが綺麗な格好に身を包み談笑しながらも食事をしてお酒を嗜み華麗に踊る。

私は場違いな気がして仕方がないが、意外なことにその姿はこの場所に溶け込んでいく。

「五月雨さん……。この服なんですか……。歩き辛いしそれにえつと……。恥ずかしい……。です……。」

私はたくさんのの人たちと同じようにドレスに身を包み大きな宝石のついたネックレスをつけていた。その全てが新鮮で困惑する。

常に頬には熱がありもじもじとしてしまった。

「よくお似合いだよ」

優しく微笑んで来た五月雨さん。意識するようになってかそれだけで嬉しくて恥ず

かしい。

遠くを見ると面倒くさそうにするナギの姿が見えるだけで、やはり五月雨さんの近くにいなければ迷子になりそうだ。スーツの裾をチョコンと持つて赤くなつた顔を見られないために顔を俯かせた。

それからは五月雨さんに挨拶をしてくるお偉いさん方に挨拶をし返して食事に舌を打つ。美味しい。赤いワインと言うお酒も悪くない。

挨拶してきた人たちは揃つて私を五月雨さんの彼女だと言つて盛り上がり私を見に来る輩まで現れてしまった。挨拶が続くせいで食事もまるで出来なく困っていると、五月雨さんは手を握つてくれて出ようか?と言う。

頷くと隣の受付までやってきて人が少なくなつたので安心した。

ホツとするさとりを見て五月雨さんは申し訳なさそうに苦笑する。

「すまないね。ここまで彼女だと言う話が広がるとは予想外だった。苦勞をかけた」「いえ、そんなことはないですよ」

「気分は大丈夫かい?」

やたら心配してくれる五月雨さん。嬉しくて大丈夫だと見栄をはるが実際はかなり苦しいものがあつた。

視線が集まるとは感情が集まるといふことである。感情が集まるといふことは想い

が集まると言うことである。その数々の感情に当てられて気分が悪いのだ。たくさんの言葉を聞いた。私のことを美しいと言う人もいればそうででもないと言う人。気品があると言う人もあれば素朴な女だと言う人もいた。下種なことを考える人もいたし品定めしてくる人もたくさん。全てが全て、言葉とは裏腹の気持ち伝わった。気持ちが悪かった。視線が痛かった。苦しかった。

そうして顔色が悪くなったのを見て五月雨さんは気を使って出てきてくれたのかも知れない。

「本当に大丈夫かい? あれほどの人が集まったのだ、色んな感情が混ざり合って気持ちが悪くなったりは」

「本当に大丈夫ですよ……。待ってください、今五月雨さんはなんと言いましたか?」

「色んな感情が混ざり合って気持ちが悪くなったりは」

「……………いつから気がついていたのでですか」

気がつかれていた。私の能力が。気味が悪いと、忌々しいと言われ続け、それが嫌で地底へ逃げ込んだ理由ともなったこの能力に気付かれていた。その事実が私の首を締めめた。今にも苦しくて喘ぐような声が出そうになる。

それが情けなくて私はこの場から逃げ出すように走り去る。五月雨さんから声がかけられた気がするが耳がそれを聞きはしない。聞こえるのは自分の息遣いだけ。

そうしてどこまでも走り着いたのは中庭だった。大きな噴水が中央に鎮座し、その水面に月を写し蜃気楼のように揺らめく。そこまできて私はやっと一息して座り込んだ。

「なにやってるんだらう。私……」

冷静になって思えば五月雨さんには大変失礼なことをしたと思う。せつかく着させていただいたドレスも皺になってしまった。本当に最悪だ。

いつも、心は無意識ながらに読んでしまい傷ついた。だから彼の心の声が聞こえる前に逃げ出したのだ。私は。大概の出会った妖怪は私のことを最初から嫌悪するような態度をとるか、上辺だけいい顔をして心の中で罵詈雑言を吐くのだ。私はどちらにせよ傷ついた。だから心が読めない動物たちをペットにして地霊殿へ引きこもって生活を続けたのだ。

嫌だった。

素直でも、建前でもどちらも私に嫌悪感を示す。私は覚り妖怪故にそれが本質。別に好きでこんな能力を得たわけではないし、使う訳でもない。だがそれは誰にもわかってもらえずに耳を塞ぐのだ。私たちは。それも全て自分を守るために。

その結果、妹のこいしは塞ぎ切つてしまい姿を消す能力を得てしまった。これはある意味皮肉だと思えた。私たち覚妖怪への嫌がらせ。辛いかと問われれば頷くだろう。

あたりまえだ。どうして普通に会話ができない。どうして外をのんびりと歩くこと

ができない。誰にでも出来るようなあたりまえが私には禁じられてしまっているのだ。

だから、ナギとの約束は果たせそうにない。だって、あたりまえが出来ない私には『恋』というあたりまえの気持ちを抱くことができないのだ。そう思うと全てがどうでもよくなつて空を空虚に見つめる。もう幻想郷に帰れるかどうかともいい。

そんな時だ。

彼はあの時のように現れる。

「いつまで座り込んでいるんだい。さて、お嬢さん。お手を拝借」

座り込んで空を見る私を塞ぐように手を伸ばしてくる彼。視界を塞ぐ彼の表情を見ると胸が痛い。まるで、私が騙っていたような気さえしてしまうから。いや、騙していたのだらう、私は。この世界の者ではなく人間でもなく、妖怪である私が人間のフリをして過ごしていたのが間違이었다のかもしれない。

それでもずっと座り込んでいるのも埒があかない。

私は話すことに決めた。それで、この物語は終わり。これにて完結するのだ。妖怪の少女が不覚にも人間に恋をして叶わずに消えるお話。私は妖怪だと知られて悲しい訳じゃない。妖怪だと、心が読めることを黙って、秘密を抱えたまま都合の良い展開を望んでいた自分が嫌で罪悪感を勝手に持っているだけ。

「五月雨さん、聞いてくれますか。私が何者で誰なのか」

手を取り立って私は彼の瞳を見た。今だけは心を讀みたくない。そう思える。

最初から私のことを深く言及せず、むしろ何にも知らないまま私を見てくれたこの人へ。

彼も黙って頷いてくれた。よかった。それだけで私は救われた気がして頬が緩む。ああただこれだけの事で喜んでしまっている自分がいる。だから嘘は止めよう。フィクションではない真実を話そう。

「信じられないような話かもしれないですけど、聞いてください。私はまず、人間ではありません」

二人で噴水の側にあるベンチに腰を掛けた。そこで私は少しづつ語り始める。

「ここからは遙か遠い幻想郷と呼ばれる忘れ去られた者が集まる世界に私は住んでました。そこには妖怪や神々がいてそれぞれ自由に生きていましたよ。全てを受け入れるのが幻想郷らしいです」

幻想郷がどんな場所なのか一通り話した頃、彼は苦笑するように言った。

「でもいいのかい？私のようなただの人間に最後の楽園の話をしてしまった。その幻想郷の管理者様とやらに怒られないかな」

確かにそうかもしれないですね。と笑う私。これは八雲紫に半殺しにされるかもしれない。

でも心を除く限り幻想郷を知ったところで彼にできる事はないと達観し、さして興味がなさそうだ。ありがたい。

「そしてここからが本題です。私はそんな自由な場所ですら居場所がなくて自分の家に引きこもりペットを愛でる生活をしていました」

今思うと。お憐やお空にこいしが居てくれていたけど、それでもどこか寂しかったのかもしれない。彼女たちは私の能力を知っていても一緒にいてくれる。だが日常に刺激のようなスパイスを求めていた私はこうなることを望んでいたのではないかという矛盾を心に産んだ。やはり、私は自分のことがわからない。

「それは私の正体が覚妖怪だから。心を読む程度の能力を持つている私の運命だった」
運命だとか宿命だとか。そう言った言葉は好きじゃないけどその言葉が合っていると自嘲。

いやはや苦労したものだ。この能力のせいで見られる周囲からの視線。どれだけ不快だったことか。

「不可思議、いえ不思議なものです。こうしてこの世界にやってくるのは」
まるで台本があつてそのまま演じてるようだ。不可思議と不思議の違いはわからないが言葉として伝えてみせる。

一通り語り終えて最後に感想を漏らした私は浮かぶ三日月が私のこの物語の終わり

を告げているような気がした。これで全て終わりだと思つたと惜しいと思つて仕方がない。ここでの体験は刺激だった。少しスパイスが効きすぎた気がしなくもないが。話し終えたらスツとした。やはり思つたことは口に出すべきなのだ。

私は全てを聞いた彼の顔を伺つた。果たしてなんと思つただろうか、この話を聞いて。頭がおかしいと引いたか、相手にもしていないか。心の声が流れてくる、その瞬間に彼は言葉を紡ぐ。

「知っているか、不可思議とは不思議の略で意味は同じだそうだ」

それは意味もわからず使つてみた私への当てつけか。どうして今そう言つたのかわからず首を傾げる。

また心を読むもうとして、またしても彼がそれを邪魔する。能力を知つた上で、読まれて、自己完結されないように遮るように彼は意識しながら。

「それでも私は思うのさ。不可思議とはどう頑張つても実現できない事柄と。科学的にも、奇跡的にもそれは表現できない物語を不可思議と。だが不思議は違う。あくまで少し不思議なお話で、なんらかの力によつて引き寄せられた物語。あるべきしてなつた物語を不思議と。完全なる持論だけだね。だから、これは不思議なお話だよ。なに、世界は不思議で満ち満ちている。だから君とこうして出会つたのは夢でもなければ幻でもない。現実だ」

彼は言ってくれるのだ。私は幻ではないと。この時間は本物だったと。

その言葉だけで救われた気がして涙が出そうになる。胸が暖かい。

「そう言ってもらえるだけで嬉しいです」

本当に。自分がここまで人を恋しく思っていたとは。自分でも気づいていないことは多いようだ。

それを見て頷いた彼も話があるようだ。

「私も一ついいかい。信じられないような話だが」

私が聞いてもらったので、次は聞くばん。なんだかこうした時間も好ましく思えてきた。

彼がなんの話をしてくれるのだろうか。興味を持って耳をすまます。するとなんとも私を騙すような話だったのだ。

「実はね、心を読む程度能力つてのは正直私からしたらあまり珍しくもない」

「・・・え?」

「無意識に勝手に私の心を除いて騙しているような気がして罪悪感抱いているようだが、私はそんなことで不快にはならないよ。昔、仕事の取引先でサイコ・マンティスと言う男と対峙したが彼も同じく心を覗くことが出来る能力を持っていてね。それにまんまと気づかず嵌められて自分の足場を不利にされたことがある」

それから語ったのはファンタジックな本や嘘みたいな話だった。

世界にはいろんな能力を持った人がいて、それはごく一部だが存在してそれぞれの能力を役立てているらしい。彼は仕事でそんな人たちとたくさん付き合ってきたからさとの能力はさして珍しくなかったとか。

私のこの気持ちはなんだっただんでしようね……。

「ふふ、あはは」

「おかしいかい？」

「ええ、とつても」

この世界は広がった。幻想郷よりも、地霊殿に眠る本の数々の中身よりずっと広がった。

冗談や嘘みたいな世界があつて、様々な生き方があつて、まるで私の悩みがちつぽけに見えるじゃないか。だが、不快じゃない。むしろ心地がいい。

「だから、君は自分の能力に悩まなくていい。確かに嫌だという奴もいるだろう、不快だと糾弾する者も多いだろう。だがそれは君が生まれ持った能力で、切つても離せないのなら、その能力を役立てて自分を認めてもらうんだ。そうすれば世界は広がる。ずっと見たこともない景色が見えるはずだ」

彼は私の腰に手を当てて立ち上がらせた。

私はなんとなくその意味がわかって苦笑した。でも嬉しかった。先ほどの言葉も含めて。

「せつかくのパーティだ、踊ろう。月夜の下でダンスもなかなか乙なものだろう」

「ふふ、私はダンスなんてできませんよ」

「いいさ、私が君を支えてやる。だから合わせてくれればそれだけでいい」

「ええ、お願いいたしますわ。私に……思い出をください」

二人は踊った。ぎこちなくも、美しくなくも踊る。洒落た曲はないし、シャンデリアもない。あるのは月の光と噴水の醸し出す小さな音楽。それに合わせるようにそよ風がハーモニーを生んで、それは一つの晩鐘。いつまでも続くような踊りにもいずれ終わりはやってくる。

「……………どうだった？」

「悪くはない……………ですわね」

私は照れくさくも素直に笑う。

もうそろそろ十二時の鐘がなる。魔法は解け目を跨ごうとしているのだ。私はそれを感じて抱き合っていた場所から下り噴水の端に腰をかけた。おそらく、私はもうそろそろ帰るのだ。あの場所に。完全に直感だったけど、間違っではないのだろうか。徐々に何かを置いてきたものが戻る感覚がある。この『少し不思議』な物語の幕が閉じるの

だ。

「……………また、会えますかね」

「きつと、会えるさ」

そう言ってくれるだけで幸せな気持ちが溢れた。これが惚れた弱みなのか、これだけで昇天するような気持ちだ。

「君との時間が本物だったと言う証を君に残させてくれ」

彼がそういうと後ろから私の手が握られた。

そして、薬指に美しい宝石の付いた指輪がはめられたのだ。

「これは……………」

「もう一度会えるようにとおまじないさ。もし受け取れないと言うなら、それを持ってまた返しにきてくれ。私は待ち続けよう」

言葉を聞いて指輪を見つめた。うっとりとして指輪から視線をはずせない。

「返しにきますよ。必ず」

「ああ、だから今日君に買ったものは全て君の物だ。帰ってきたらまた全て纏めて返す
としよう」

「それは楽しみですね」

微笑んで喜ぶ。

私もずいぶんこの短時間で素直になつたものだ。

「じゃあ、これでさよならだ」

「はい、また会いましょう」

背を見せて歩いていく彼。私はその背を見つめた。抑えて月を見つめた。

あの三日月をお願いするように祈りを込めて。

「五月雨さん」

言葉で彼の動きを止めた。

だがこちらには振り返つてくれない。でもそれでいい。私はどうしても伝えたい言葉があるのだ。

「大好きですよ」

短くて、完結された言葉だ。この一言で今の私の気持ち伝わるんだから凄いな言葉。

「ああ、私も大好きだよ」

冗談のように笑いが含んだような声音だったが、不快にはならない。だって彼は嘘だらけなのだ。ずっと心を覗いてきてわかる彼の素顔。嘘で塗り固められた彼はきつと本当の姿も誰にも見せないのだろう。名前も、言葉も、言動も嘘で嘘しかない彼。そんな嘘に惚れて、真実を見て愛したいと思つたのは私の負けなのか、勝ちなのか。そんなどうでもいいことが頭に浮かんで、萎んで消えた。

「……………り様」

「……………とり様！」

遠くから私を呼ぶ声が聞こえる。懐かしくて、暖かくて、私を迎えてくれる声。ゆっくりと目を開けるとそこには見慣れた可愛い二人の姿。

「お燐、お空、ただいま」

さとり様！と胸に飛び込んでくる二人を抱きしめて彼女らの想いを受け取った。帰る場所があるのは嬉しいものだ。

「ねえ、二人とも聞いてくれる？ 私のちよつとした冒険譚。少し不思議なお話を」

それから私が思った感情を、抱いた気持ちを彼女らに語ってしまうのだろう。誰かに聞いて欲しくて仕方がないのだ。もしこの場にいるならこいしにも届いているはず。一応、こいしも聞いてくれると嬉しいなと言かけて、私は語りだす。

この物語を通して思うことがある。やはり私には完全なるファンタジーのような夢物語ではなく、本当のSFのような話でもなく、『少し不思議』なSFの方が好きである

という事。人よつてはSF意味が違うかもしれない。私の思うSFが間違いなのかも
しれない。それでもやはり私にとつてのSFは
『少し不思議』に他ならないと。

「あれこれ惚気話聞かされただけじゃね？砂糖吐きそうなんだけど。ちよつとらーん！
らーん！コーヒー持つてきて、ブラックで、今すぐ」

全部を語れと言われたので語つたのにこの扱いはなんだろうか。納得いかない。若
干イラつとしたが八雲紫は御構い無しだと知っているので言わないでおく。

「そういえば、SFの意味間違つてたじゃないですか」

「ばつつか、違うのよ？決して知らなかったとかじゃなくて、純粋なさとりちゃんにあえて
嘘を教えて自分で気付いて成長してほしいなって言う賢者様の心遣いよ」

調子のいいことばかり語るものだ。

思わず「は？」と言いそうになつたが押し黙る。すると、近くに隙間が現れて藍がコー
ヒーを片手にやつてきた。それを紫に手渡したのを見送つた。

「ちなみに、紫様は素で間違えて覚えていましたよ」

「ちよつ、藍！」

「と言われても覚妖怪がそれに気づかない訳がないじゃないか。知っていたから黙ってあげたのにこの式は案外黒いかもしれない。」

しばらく揉めたあと、ごほんと咳き込む紫を見て本題に入るのだと察した。

「それで、この異変の正体だけど。正直まったくわかってないわ。こちらで対策できない以上あの男に頼るしかない。そのことで不満はないわね」

「はい」「仕方がないのでは？」

「仕方がないって、藍も可能性はあるんだからね？」

「それは分かっています」

夢送り異変。今回の異変を紫と私の中で決定された呼び方だ。その概要はこうだ。

まず。寝たあとに夢を見ることがある。その夢で完全に見知らぬ世界だったとしたら、それは外の世界だと思わなければならない。そして、午前六時に夢で見たその場所で目を覚める。外の世界に行つた場合、自分の体は幻想郷から消え、夢の世界に送られるのではなく、文字通り『夢で見た世界』に送られる異変だという事。

午前十二時と共に姿は幻想郷へと戻ってきて、その時身につけていた物などはそのままだという事。これが全てだ。

その証拠にさとりりの薬指には今でも指輪をはめており外す気配がない。彼女の中で宝物となつてしまつたのだろう。

「はあ……難儀な異変ねえ。はつきり言つて面倒くさい」

ちなみに、今日紫が外の世界にいたのは本人がさとりと同じように夢の世界に送られてしまつたのだ。だからこれが冗談だとか間違ひじゃないと知つてしまつた。彼女は隙間を使えるので直ぐに幻想郷へと戻つてきたのだが本人も信じられない気持ちだつたのだ。

「藍」

「はい。射命丸文や姫海棠はたてにそれに、力のある妖怪や神たちにこの話を幻想郷全域に広めるようにしています。現在は幻想郷の住人の九割は内容を把握しています」

「流石、仕事が早いわね」

紫も一安心だと心を落ち着けた。

だがやることは多すぎる。恐らく外の世界に出たことで調子こくもの、好き勝手する者も少なくはないだろう。幻想郷の住人は力こそ全てで常識があるやつが少ないのだ。

だから能力を使つて送られてしまつた者の力や能力を制限しなければならぬし、他にも取り掛からなければならぬ問題が多すぎるのだ。紫は「老けちゃう……」などと呟いていたが、それを聞いた藍とさとりは菩薩の様な表情をすると一言も話さず聞かぬ

かつたふりをしたそうだ。

さとりはひと段落した後、薬指の指輪を手でなぞって頬を赤くした姿が発見されたとお隣とお空が騒いでいたがこれは別のお話。